

モンゴル国における「牧地保有」の概念について

ー調査方法とデーター

上村 明 (Kamimura Akira)*

0. 目的

この発表の目的は、発表者がおこなった牧畜民世帯調査における談話のなかに出現したモンゴル語“эзэмших”（一般に英語で“to possess”、日本語で「占有」あるいは「保有」と訳される）の分析を通じて、その多層的で文脈依存的な語法を明らかにし、現在国際ドナーの主導で作られている牧地法草案における“эзэмших”の概念とのずれを指摘するとともに、モンゴルにおける牧畜民の牧畜資源、とくに牧地の利用についての意識の特徴を明らかにすることにある。

1. 背景

モンゴル国では、ソ連経済とコメコン体制の崩壊以降、1990年代はじめからIMFや世界銀行を筆頭とする国際機関や日本などの援助国の援助をうけ入れ、それらの意思にそった開発をおこなってきた。その目標は、1990年代はじめには社会主義時代の「中央計画経済」から「市場経済」への移行が前面におしだされたものの、90年代なかば以降は「安定した経済成長」とならんで「貧困」「環境」に重点がおかれるようになった。

モンゴル国の牧畜は、市場経済への移行の過程でうまれたおおくの失業者を吸収した。かれらは、ネグデル（牧畜協同組合）解体時の家畜の私有化によって家畜を手にいれたが、それによって少数の家畜しかもたないおおくの牧民世帯が発生した。さらに、こうした牧民がゾド（雪害）により甚大な被害をこうむったこと、さらに都市部に集中する開発によって生じた地域格差緩和のため、牧畜民は「貧困対策」の重要なターゲットとなっていく。

こうした流れのなかで、牧畜における土地制度についても、国際援助機関は、90年代はじめの古典的なハーディンの「コモンズの悲劇」テーゼにもとづいた牧地私有化の論理を後退させ、かわりに「コミュニティを基盤にした土地利用管理」「community-based land management」を開発のモデルとして提唱するようになっていく。このモデルのプロジェクトのうち、最近実施されたあるいは実施中の主なものには、UNDPの“Sustainable Grassland Management”やSDC（スイス開発協力庁）の“Green Gold”などがある。

これらは、牧地の境界を定めその牧地を管理する牧民グループを組織し、この牧民グループに牧地に対する保有権を付与するべくあらたに「牧地法」を制定しようと、草案の作成と牧民への啓蒙、政府への働きかけをおこなっている。

そこで主張されるのが、牧畜民たち（この場合ゴビ地方の牧畜民は除外される）の大多数は、牧地保有の立法化を望んでいるというものである。国際援助機関の開催するNational Conferenceで

* 上村 明、東京外国語大学。Kamimura.akira@tufs.ac.jp.

бусад сурвалжтай харьцуулан үзэхэд “Монголын эртний хаадын үндэслэсэн үндэсний их тууж хэмээх” ховор чухал түүхийн дурсгалын нэг хувилбар болох нь төвөггүй мэдэгдсэн юм. Уг зохиолыг одоо галиглах, тайлбар сэлт хийх ажил хийгдэж байна.

Гурав. 2004 онд Монголын төв нутгаас урьд өмнө илрээгүй байсан XIII-XIV зуунд хамаарах тусгай тахилга чулуу бүхий хүн чулууг олж үзсэн юм. Уг дурсгал нь урьд өмнө энэ чиглэлийн судалгаа хийсэн эрдэмдтийн анхааралд хараахан өртөөгүй байсан юм.

Ийнхүү энэ удаад эрдэмтэн судлаачид та бүхэнд Монгол улсаас шинээр илэрч олдоод буй ховор сонин зүйлс олноор олдож байгаа нь судлаачид бидний өмнө тулгарч байна. Ялангуяа шинээр олдсон түүх-соёлын дурсгалын талаар өөрийн чиглэлийн судлаачидад мэдээлэх, тусламж хүсэх, санал солилцох, хамтран судлах явдал ихээхэн чухал болно.

のアピールはともかくとして、われわれ自身のセレンゲ、トゥブ、ウブルハンガイ県でおこなったアンケート調査でも約 60% の牧民が牧地保有に肯定的だという結果が出た。

しかし、この“эзэмших”「保有」を牧民がどのような意味で使用しているかを、さらに聞き取りによってたしかめると、ドナー側の理解との隔たりがあることが分かる。

2. 民法、土地法における“эзэмших”

モンゴルの法体系のなかでも“эзэмших”の意味には、食い違いがみられる。モンゴル国民法は、ドイツ民法を手本として作られたため、“эзэмших эрх”は、日本国民法の「占有権」とおなじく、本権ではなく占有の事実から発生する仮の権利であり、占有の事実がなくなれば消滅する。これに対して、モンゴル国土地法の“эзэмших эрх”は、証書が発行されそれが権原となり、権利が無効とされないかぎり占有の事実がなくなっても効力をもつ。このように民法の“эзэмших эрх”(占有権)と区別するため、日本の文献では、土地法の“эзэмших эрх”を「保有権」と訳すことが増えている。本来、民法は、土地法の基本法として位置づけられ整合性が保持されなければならないはずだが、このような矛盾が法体系の中にあるのは、90 年代以降、モンゴル国の法整備が外国からの圧力に対して対処療法的におこなわれてきたことが最大の理由だろう。

1992 年憲法は、牧畜を国民統合のアイデンティティとすることを宣言し、第 5 条 5 節において、「畜群は国民の富であり、国家の保護を受ける」としている。また、同憲法は土地の私有を認めてはいるが、第 6 条 3 節で私有化可能な土地から牧地を除外している。

1994 年 11 月 11 日、新土地法は、市場経済化の法整備に関連したローンのからむ ADB などの圧力をモンゴル政府がうけるかたちで成立した。この土地法は、所有権、保有権(処分権なしで定められた期間と条件のもと自分の支配下におく権利)、使用権の 3 つを定義している。しかし、ADB の要求した土地所有権の規定はなく、牧地利用についても十分な規定はなかった。ADB はこの法律の規定の曖昧さ、一貫性のなさを批判し、それをうけて 3 度にわたる改正がおこなわれた(ADB 2002:4-5)が、所有権についての規定が追加されることはなかった。そのかわり、2002 年 3 度目の土地法改正後、土地私有化法が制定された。この法律は居住地と農耕地について制限付きの私有化をおこなうもので、牧地はふくまれていない。

現在検討中の牧地法草案は、牧地管理のため組織された牧民グループに対してその牧地の「保有権」“эзэмших эрх”をあたえるというものだ。牧地法草案の保有権は、土地法と同様に、権利証書の譲渡および担保が可能である¹。牧民グループは、冬・春の牧地のある、おおくの場合谷ごとで境界を引き、その境界のなかに冬・春営地をもつ牧民世帯によって構成される。そして、明確な牧地管理計画をもつことが要求される。現在の草案では、保有が認められるのは冬と春の牧地のみである。

土地法と牧地法草案の“эзэмших эрх”「保有権」は、1 年から 15 年、あるいは 60 年間という長期間の、用途を明示した用益権であり、排他的な物権の権利である。また、“эзэмших”「保有」するとは、その権利を行使する行為にほかならない。

¹ ただし、譲渡の相手はその牧地を牧地と使用する、牧畜に従事するものに限りという制限はつけられている。

3. 牧畜民の認識による“эзэмших”

もちろん牧民は、そのような法律用語としての“эзэмших”の内容を正確に理解して日常的に使っているわけではない。一方、ドナー側や調査する側は、多くの場合、日常用語としての“эзэмших”について無頓着であり、土地法上の“эзэмших”だけに注目し固定された定義によって理解しがちである。しかし、この語も、ほかのあらゆる言語や語の用法とおなじく、よく調べれば、かならず辞書的な意味で使われるというのではなく、文脈依存的で、したがって多層的な意味をもつ語としてあらわれてくる。

3. 1 “эзэмших”「占有する」と“эзэмших”「保有する」

牧民が法律用語としてこの語を使っているわけではないことは、われわれがおこなった牧民世帯の調査²でも、すぐにわかった。法律用語として“эзэмших”を想定し質問していたため、質問の意図にあった答えが出てこなかったのである。

当初、土地法による冬・春営地の保有権取得状況を調べる質問では、

Танд эзэмшсэн өвөлжөө, хаваржаа бий юу?

「あなたは「保有」した冬・春営地を持っていますか？」

と、質問していた。しかし、「はい」という答えが返ってきても、それは、必ずしも保有権を取得しているとは限らなかった。「では権利証書を見せてくれ」というと、登録はしていないと言われることが多々あったからである。

この質問は、

Өөрийн гэсэн өвөлжөөний хашаа хороотой юу?

「自分のものといえる冬営地の家畜囲いを持っていますか？」

という冬営地の占有（これもあとで述べるように完全に排他的なものではない）の事実を確認する質問と置換でき、保有権取得について聞く場合、この質問のあと別途、

Өвөлжөөгөө бүртгүүлсэн үү? 「冬営地を登録しましたか？」あるいは、

Өвөлжөө эзэмших гэрчилгээ авсан уу? 「冬営地を保有する証明書を取得しましたか？」

という質問をする必要があった。

このように、日常語としての“эзэмших”は、土地法上の保有権取得をつねに連想させるものではない。

また、このような事実としての占有を意味する“эзэмших”と土地法上の法的行為としての“эзэмших”が、おなじ文脈のなかで、とくに区別されることなく使用されることもある。

2006 年夏、トゥブ県のエルデネサント郡の役場での聞き取り調査中、冬営地・春営地を「保有」した（この場合土地法にしたがって権利証書を取得した）牧民世帯の割合を質問したすぐあとで、2・3 箇所の予備の冬・春営地(хонд)を「保有」している世帯もあることが話題に出た。同行した日本人の法学者や法社会学者たちに、通訳がとくに区別のなかったこの 2 つの“эзэмших”を、そのままおなじ「保有」という日本語で通訳したため、日本人は、このソムではひとつの世帯が複数の

² 2006 年夏に、ウランバートル周辺、トゥブ県で 98 世帯、2007 年夏セレンゲ、トゥブ、ウブルハンガイ、アルハンガイの各県で 70 世帯の牧民世帯に対して、土地法の実施状況と土地に対する権利意識についてアンケート調査および聞き取り調査をおこなった。

冬営地や春営地を登録・(土地法上の)「保有」ができると理解してしまった。しかし、予備の冬・春営地(хонд)の“эзэмших”は、土地法上の「保有」ではないことがかなりの時間のあと判明した。説明したソムの役人にとっては、自明であるかもしれないが、談話上のそれぞれの“эзэмших”は、文脈によってその結びつく背景がことなり、その正確な理解にはローカルな知識が必要なことをしめしている。

3.2 “эзэмшүүлэх”「保有させる」

このような2つの“эзэмших”を、文法的なマーカーによって区別することもある。

2007年夏調査をしたセレンゲ県マンダル郡のトゥンヘル村(бар)の役場での聞き取りで、採草地の保有権の設定について、「長年(牧畜民が)保有してきた採草地を(郡行政が)保有させた((малчид) олон жил эзэмшиж ирсэн хадланг (сумын захиргаа) эзэмшүүлсэн)」という説明があった。この最初の“эзэмших”①と使役形から還元されるつぎに出てくる“эзэмших”②は、明らかにことなる。というより、②の“эзэмшүүлэх”は、単純に“эзэмших”の使役形ではなく、使役形というマーカーによってことなるものを意味しているといった方がいい。つまり、②は、“эзэмшүүлэх”「保有させる」という言い方で、土地法上の「保有」を意味している。

同時に、①は長期間継続して管理使用してきたという事実とそこから発生する「占有権」(完全な排他的権利というより優先的な用益権)をしめし、②は①にもとづいて行政がそれを追認するという、牧畜民や地方の行政の理解する保有権設定の図式を読み取ることができる。実際の保有権証書発行の手続きにおいて、①をバグ住民総会で承認しバグ長の保証とともにソムに申請する。②はこの手続きを反映しているのである。

このような“эзэмшүүлэх”の使い方は、かなり一般的で、牧畜民や地方の行政の、②つまり土地法上の「保有権」は、①という管理使用の事実から発生する権利を、単に裏書しているのであって副次的なものでしかないという認識が現れているといえる。しかし、法的な原則論からいえば、いったん土地法上の保有権が設定されてしまえば、①はそれに対抗することができない。この点について、彼らがどの程度認識しているか問題である。

3.3 “эзэмших”は、排他的であるか?

土地法上の「保有権」は、私的所有制度のなかの物権として、排他的な権利であると、国際援助機関などドナーの側の一般的な理解では認識される。それでは、現場の牧畜民や地方の行政の理解では、「保有権」の根拠となる、牧地など牧畜資源の“эзэмших”は、どのように認識されているのだろうか?

つぎのような質問をしてみた。

「あなたは、今年は自分の冬営地周辺の牧地を休ませようと、違う場所で冬をすごしました。その休ませた冬営地にほかの牧畜民世帯がやってきて家畜を放牧し始めました。あなたはどうしますか?」

Та дараах тохиодолд яах вэ? Та бүртгүүлсэн өвөлжөөнийхөө бэлчээрийг энэ жил амрууль гээд өөр өвөлжөөнд буулаа. Тэгэхэд нэг айл танай хоосон өвөлжөөнд ирээд буусан. Та яах вэ?

この問いに対して80%以上の牧畜民が、ゾドなどの自然災害でしかたなく移動してきた牧畜民や、家畜の少ない困窮した牧畜民であれば、そのまま代償をとらずに使わせると答えた。すぐに追い出すと答えた

牧畜民は非常に少数だった。また、保有権証書をもっていなくてもその対応はかわらないと答えた牧畜民が半数以上だった。

また、牧地を「保有」するとして、どのような形態がのぞましいかという質問に対して、「公共で」保有する(нийтээр эзэмших)のがのぞましいと答えた牧畜民も相当数いた。

アルハンガイ県イフタミル郡の牧民グループの長のひとりは、“эзэмших”の意味について聞かれて、「保有権を所有権のように理解するひともいるが、それは間違っている。・・・保有権がある牧地でも4・5日ぐらいで移動してしまうなら、保有権のない牧畜民が放牧することも許される」と答えている。

これらからも、ある牧地をある牧畜民あるいはその集団が“эзэмших”しているとは、管理・使用の実績にもとづく支配であって、他者の使用を完全に排除するものではないことがわかる。

4. 検討

うえで、“эзэмших”という語が、法体系の中の矛盾や実際の牧地利用、また土地法の施行の実態のなかで、一様とはいえない意味でつかわれ、新しい用法も生み出されていることを見てきた。これらは、ひとことで言えば、日本にも共通するところの、グローバル化あるいは、新自由主義的な考えをどのように受け入れ、反発して来たかの具体例である。

90年代初めのADBの圧力の背景には、新古典派経済学を奉ずるIMFや世銀に主導され、ロシアやモンゴルの経済に壊滅的な影響をあたえた「ショック療法」的市場経済化政策があった。私的所有が市場経済の基盤であるから、牧地も私有化の例外になりえないとする市場原理主義に、ハーディン「コモンズの悲劇」テーゼは、それを正当化する論理をあたえた。共有牧地は私有化されないと荒廃をもたらすとするこの論理は、現在では代表的な「開発の語り」“development narrative”とされ、批判の対象となっている。

たしかに、現在検討中の牧地法草案の規定する牧民グループによる牧地の共同保有は、私的所有ではない。その主体は、市場経済の単位となる個人ではないし、また牧地の所有権は国家が持ちこれでも市場経済の基礎となる処分権が認められていないからである³。

しかしながら、つぎのような点で、牧地の私的所有化論と共通する。

ひとつは、権利主体と対象の明確化をもとめる点である。牧民グループの成員と冬・春の牧地の境界の明確化は、フェルナンデス・ギメンズ(2002)のいうコミュニティの空間的・社会的境界を明確にすることであり、それは、土地権を保障し、自然資源の管理がうまくおこなわれるために不可欠だと一般に信じられているが(p.51)、モンゴルでは、コミュニティ境界を明確化するには、つぎのような困難があるとする。(1)多様で、重層的かつ偶発的な資源を牧民が利用し、(2)資源の境界も本質的に曖昧でたえず移動しており、(3)資源を利用する牧民も多様で重層的な集団を構成し、(4)潜在的使用者を排除しない資源利用倫理を共有していることである。したがって、コミュニティの空間的・社会的境界を明確にすることは、牧畜の移動性と経営の柔軟性を損ねてし

³ しかし、権利証書の譲渡と担保を認めているということは、それが財産として処分できるということにつながる。

まうことになる。近年モンゴルでは乾燥化が進み、移動と経営の柔軟さの重要度は、将来さらに高まると予想される。

また、ゾドなどの自然災害時には、とくに移動性の確保が大事になる。ゾドに対する対策の選択肢は、①酪農ファームなど定住集約的な経営形態への転換、②干草の貯蔵システムの復活、③オトル用地の確保などが考えられるが、①と②は、高コストで、とくに①は、経営が成立するのは、規模の大きい市場の近くに限られている。また、③は、オトル用地を十分に確保するには、かなりの政治的努力が必要といわれ、どれもすくなくとも全国規模でおこなうことは現実的でない。結局、牧畜民が自然災害などにおいて最後に頼るのは、移動を可能にする互酬的な倫理である。

そのため、排他的な牧地の所有権を主張する牧畜民も、その多くがゾドの時どうするかとたずねられると、返答に窮してしまうか、主張を変えることになる。このことは、設問の立て方によって回答がおおきくかたよること、単純なアンケート調査では、なかなか実態が把握できないことを端的に示している。

また、「牧民グループ」が基金を持ち、NGOやホルショーなどの形態を経て、企業体になることが理想とされていることは、結局のところ、それらの国際プロジェクトが牧地の私有化を目指すひとつの手段でしかないことを示している。

5. おわりに

国際援助機関のドナー側の人間、また現場の牧畜民や地方の行政の人間は、ひとつの“эзэмших”という語を使っているという前提に立ちながら、じつはそれを資源として、一様ではない意味を引き出して利用していることが、以上からわかってくると思う。

リバタリアンとコミュニタリアンとの対立の図式から言えば、この語は、一方で市場原理の導入の圧力に対して、牧地の私有を認めない憲法にしたがって、牧地の共同管理を守ることにも使いうるが、その反面、牧畜の移動性や柔軟性を損ない、牧地への市場原理の導入につながるかもしれない、排他的利用権設定の契機ともなっている。

「コモンズの悲劇」は、牧地の利用、管理を私的所有に一元的にむすびつけたが、“эзэмших”の多様な意味の分析は、牧地の利用、管理、所有をいったんばらばらに切り離し、牧地管理のあるべき姿の再検討につなげていく可能性を拓くと思われる。

文献

ADB

1995 *Report and Recommendation of the President to the Board of Directors on Proposed Loans and Technical Assistance Grant to Mongolia for the Agriculture Sector Program*. RRP MON: 27536.

2002 *Program Performance Audit Report on the Agriculture Sector Program (Loan 1409-MON[Sf]) in Mongolia*. PPA:MON 27536.

2003 *Mongolia's Environment: Implications for ADB's Operations*.

Behnke, R.H., Scoones, I.

1993 *Rethinking Range Ecology: Implications for Rangeland Management in Africa*. In Behnke et al. 1993, pp.1-30.

Behnke, R.H., Scoones, I. and Kerven, C.(eds)

1993 *Range Ecology at Disequilibrium: New Models of Natural Variability and Pastoral Adaption in African Savanas*, London: ODI.

Bruce, J. and R. Mearns

2002 *Natural Resources Management and Land Policy in Developing Countries: Lessons Learned and New Challenges for the World Bank*. Drylands Programme. Issues Paper No. 115. London: International Institute for Environment and Development.

The equilibrial- non-equilibrial continuum in grazing ecosystems(p.39)

Ellis J.E., Coughenour, M. B. and Swift, D. M.

1993 *Climate Variability, Ecosystem Stability, and the Implications for Range and Livestock Development*. In Behnke et al. 1993, pp.31-41.

Fernandez-Gimenez, M.

1999a *Reconsidering the Role of Absentee Herd Owners: A View from Mongolia*. *Human Ecology* 27(1):1-27.

1999b *Sustaining the Steppes: A Geographical History of Pastoral Land Use in Mongolia*. *The Geographical Review* 89 (3):315-342.

2000 *The Role of Mongolian Nomadic Pastoralists' Ecological Knowledge in Rangeland Management*. *Ecological Applications* 10(5):1318-1326.

2001 *The Effect of Livestock Privatisation on Pastoral Land Use and Land Tenure in Post-Socialist Mongolia*. *Nomadic Peoples* 5(2):49-66.

2002 *Spatial and Social Boundaries and the Paradox of Pastoral Land Tenure: A Case Study from Postsocialist Mongolia*. *Human Ecology* 30(1):49-78.

Fernandez-Gimenez, M. and B.Allen-Diaz

1999 *Testing a non-equilibrium model of rangeland vegetation dynamics in Mongolia*. *Journal of Applied Ecology* 36: 871-885.

2000 *Vegetation change along gradients from water sources in three grazed Mongolian ecosystems*. *Plant Ecology* 00: 1-18,

- Fernandez-Gimenez, M. and B. Batbuyan
2000 Law and Disorder in Mongolia: Local Implementation of Mongolia's Land Law. Presented at CCCSCNM.
- Finke, P.
1995 Kazak pastoralists in western Mongolia: economic and social change in the course of privatization. *Nomadic Peoples* 36/37:195-216.
- 2000 From 'Common Property' to Open Access: Changing Pastoral Land Tenure in Post-Socialist Mongolia. Presented at CCCSCNM.
- Fratkin, E.
1997 Pastoralism: Governance and Development Issues. *Annual Review of Anthropology*, Vol. 26, pp.235-261.
- Fratkin, E. and R. Mearns
2003 Sustainability and pastoral livelihoods: Lessons from East African Maasai and Mongolia. *Human Organization*, Summer 2003(62)2:112-122.
- Hannam, I.
2008 Report to United Nations Development Program Mongolia on Review of Draft Pastureland Law of Mongolia. UNDP Sustainable Land Management for Combating Desertification in Mongolia, Ulaanbaatar.
- Hanstad T. and J. Duncan
2001 *Land Reform in Mongolia: Observations and Recommendations*, RDI Reports on Foreign Aid and Development #109. Seattle, Washington.
- Humphery, C. and D. Sneath
1999 *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*. Duke University Press: Durham.
- Mearns, R.
1996 Community, collective action and common grazing: the case of post-socialist Mongolia. *Journal of Development Studies* 32(3): 297-33
- Mearns, R. and E. Dulamdary
2000 Sustaining Livelihoods on Mongolia's Pastoral Commons. Presented at CCCSCNM.
- Mearns, R., M. Leach and I. Scoones
1998 The Institutional Dynamics of Community-Based Natural Resource Management: An Entitlements Approach. Presented at "Crossing Boundaries," the *Seventh Annual Conference of the International Association for the Study of Common Property*, Vancouver, British Columbia, Canada, June 10-14, 1998.
- Pieterse, J. N.
2001 *Development Theory: Deconstructions/Reconstructions*. SAGE Publications: London.
- Müller, F.

- 1995 New nomads and old customs: general effects of privatisation in rural Mongolia. *Nomadic Peoples* 36/37:175-194.
- Müller, F and Bat-Ocir Bold
1996 On the Necessity of New Regulations for Pastoral Land Use in Mongolia. *Applied Geography and Development* 48(1996):29-51.
- Russel, N.P., Adya, Y. and Tseveen, T.
2000 Role of the Livestock and Crop Economy in the Mongolian Economic Transition. In Nixon, F. et al.(eds.) 2000 *The Mongolian Economy: A Manual of Applied Economics for a Country in Transition*. Edward Elgar Publishing, pp. 154-174.
- Sheehy, D.
2000 Sustaining Livelihoods with Livestock on the Pastoral Commons of Mongolia. Presented at CCCSCNM.
- Sneath, D.
1998 State Policy and Pasture Degradation in Inner Asia. *Science* 281:1147-1148.
- 2002 Custody and Property: Land, indigenous understanding, and the conceptual basis of development policy in pastoral Mongolia. In C. Humphrey and R. Mandel (eds), *Markets and Moralities: Ethnographies of Postsocialism*, Routledge.
- 2001 Notions of Rights over Land and the History of Mongolian Pastoralism. *Inner Asia* 3(2001): 41-59.
- Swift, J.
2000 Rural Development: The Livestock Sector. In Griffin, Keith B.(ed) 1995, *Poverty and the Transition to a Market Economy in Mongolia*. St. Martins Press. pp.104-133.
- Swift, J. and R. Mearns (eds)
1993 *Nomadic Peoples* 33.
- World Bank
2003 *Land Resources and Their Management: Mongolia environment monitor 2003*.

Илтгэлийн хураангуй (Summary)

Монгол улс дахь “бэлчээр эзэмших” гэдэг ойлголтын тухай

Камимүра Акира

Тус өгүүллийн зорилго нь зохиогч орон нутгийн захиргаа болон малчидийн дунд явуулсан Газрын тухай хуулийн хэрэгжилт, Бэлчээрийн тухай хуулийн төслийн талаархи ойлголт, хандлагыг судлах асуулгын судалгааны явцад тохиолдсон жишээн дээр “эзэмших” гэдэг

Монголд архивын мэргэжилтэн бэлтгэх хэрэгцээ, шаардлагын зарим асуудалд

З.Баасанжав (Z. Baasanjav)*

Архивын салбарыг чухал гэдэгтэй хэн ч маргахгүй байх аа. Гэтэл энэ салбарын мэргэжилтэн дотооддоо бэлтгэх асуудалд бага анхаарал тавьж ирсэн байна. Үүний учир шалтгааныг өнгөрсөн тогтолцооны үед гадаадад (ЗХУ-д) энэ чиглэлийн мэргэжилтэнг бэлтгэж байсан, ажлын байрны эрэлт харьцангуй бага, архив нь олон түмнээс тасархай, хаалттай, нийтийн хүртээл боломж муу байсны улмаас энэ салбарын нийгмийн үнэлэмж ихээхэн буурч, өөрөөр хэлбэл бичиг баримтыг “хадгалах” газар мэтээр ойлгогдож байсан зэрэгтэй холбон авч үзсэн болно.

Өөрчлөлт шинэчлэлийн өнөөгийн монголын нөхцөлд энэ салбарт хийгдэж байгаа шинэчлэл, нийгмийн хийгээд салбарын хэрэгцээ шаардлага, мэргэжилтний эрэлт хэрэгцээ зэрэг нь өөрийн их дээд сургуульд архивын салбарын мэргэжилтэн бэлтгэх зайлшгүй шаардлага хэрэгцээ дэвшүүлэн гаргаж ирлээ.

Манайд энэ салбарын мэргэжилтэнг бэлтгэх талаар хийсэн зүйл бага ч гэсэн байсныг үгүйсгэж болохгүй.

Харин өнөөдөр архивын мэргэжилтэн бэлтгэх асуудлыг төр, засгийн бодлогын хэмжээнд авч үзэх шаардлагаа байгааг өгүүлэхийн сацуу энэ мэргэжлийн сургалтын хөтөлбөрийн нэгэн хувилбарыг санал болгож байгаа юм. Ингэхдээ архивын мэргэжлийн бакалаврын шатанд тавигдах шаардлагуудыг авч үзсэн болно. Эдгээр шаардлагыг нийтлэг болон тухайн мэргэжлийн шаардлагууд хэмээн ангилан авч үзлээ.

* З.Баасанжав, МУИС-ийн багш, доктор (Ph.D), профессор.

үгийн хэд хэдэн утга санааг тодорхойлж эрх зүйн нэр томъёо болох “эзэмших”-тэй харьцуулж үзэх, мөн түүнд үндэслэлд малчидын байгалийн баялаг, тухайлбал бэлчээрийг ашиглах талаархи ухамсарын зарим нэг онцлогыг тодорхойлоход оршино.

Хуулиуд болон Бэлчээрийн тухай хуулийн төсөлийн заалт, мөн судалгаанд тохиолдсон жишээнээс үзэхэд:

- (1) Газрын тухай хууль болон Бэлчээрийн тухай хуулийн төслийн “эзэмших”-ийн утга санаа, Иргэний хуулийн “эзэмших”-ийн утга санаа хоорондоо зөрөөтэй,
- (2) Эрх зүйн үүднээс үзэхэд Бэлчээрийн тухай хуулийн төсөл дэх эзэмших эрх нь олгогдсон эрхийн гэрчилгээнд эрхийн үндэслэл байхад малчидын ойлголтоор бол эзэмших эрх нь олон жил “эзэмшиж ирсэн” түүх уламжлалд эрхийн үндэслэл оршдог,
- (3) Эрх зүйн хувьд эзэмших эрх нь онцгой бөгөөд халдашгүй байхад малчид эзэмшсэн бэлчээрээ цөөхөн хоногоор бол зөвшөөрөлгүйгээр айлын малд идүүлж болно, мөн өөрийн эзэмшсэн өвөлжөө, хаваржаагаа хоосон байхад нь ган, зуд зэрэг байгалийн гамшигаас зугтаж ирсэн айл болон мал цөөнтэй ядарсан айлыг шууд буулгаж болно гэж үздэг.

Үүнээс дүгнэхэд эрх зүйн системийн хувьд “эзэмших” гэдэг үгийн утга санаа нь тогтворгүй, хууль хоорондоо зөрөөтэй байгаагаас гадна Бэлчээрийн тухай хуулийн төсөл дэх тус нэр томъёоны утга санаа нь малчидын жирийн хэрэглээний “эзэмших” гэдэг ойлголтоос нэлээд ялгаатай байна.

Одоо яригдаж байгаа Бэлчээрийн тухай хуулийн төсөл бол “малчидын бүлэг”-ээр бэлчээр эзэмшүүлэх заалттай юм. Зохиогч 2007 онд Сэлэнгэ, Төв, Өвөрхангайн 3 аймгаар асуулгын судалгаа явуулахад “хуулиар бэлчээр эзэмшүүлэх нь зөв үү?” гэсэн асуултанд малчидын олонх нь зөв гэж хариулдаг байсан боловч “малчидын бүлгээр эзэмшүүлэх ёстой” гэж хариулсан малчин харилцангуй бага, зарим нь “нийтээр эзэмшүүлсэн нь дээр” гэж хариулсан юм. Мөн ган, зудын үед яах вэ гэж асуухад ихэнх малчид нь бэлчээр эзэмшүүлэх нь буруу байх гэж хариулдаг.

Үүнээс үзэхэд асуух, хариулах хоёр тал нэг ижил асуулт, хариултыг өөр өөрөөр ойлгож байж магадгүй. Мөн дан асуулгаар ийм нарийн төвөгтэй асуудлыг дүгнэж болохгүй гэдгийг харуулж байна.